

異能の政治経済学者ハーシュマンの理論と思想—再評価と現代的意義—

高橋 直志* (名古屋外国語大学[非常勤講師])

報告要旨

本報告では、国際経済学・開発経済学を始めとして、組織論や思想研究などの多くの分野にまたがる業績を残しながらも、その内容・主張に一貫性を見出しにくいこともあって、今なお評価が定まらないA.O.ハーシュマン(1915–2012)の著作群に対して、報告者自身が考案した仮説と照らし合わせを行い、その妥当性を検証しながら通説の一部訂正を試みる。

そもそも、ハーシュマンに対する一般的評価といえ、壮年期の著作(不均整成長理論)に着目して「(やや)ケインジアン寄りのエコノミスト」「中道(穏健)左派の経済学者」とするもの、晩年の著作(資本主義擁護論)に対して斜に構えながら「転向者」「便利屋」と酷評するものがあり、執筆された時期によって評価が大きく異なる点に留意しなければならない。

この点を踏まえつつ、報告者は「ハーシュマンは青年期から晩年に至るまで、一貫して二分法的な考え方を拒絶してきた。むしろ、二分法的な考え方から生じる空隙に対し、自身の洞察力をもってそれを埋める業績を残したことにこそ、彼の真骨頂がある。」という仮説を提示したい。この仮説は、詰まるところ、ハーシュマンは若い頃より「奇跡のレシピなど存在しない。常に二段構え、三段構えで前に進め。」というリアリストであり、そのために政策のブレインとして参画することやイデオロギー闘争とは距離を置きつつ、漸進主義的な政策提言、もしくは社会訓の提示に徹したのではないか、という解釈にもつながる。そして、年齢を重ねるにつれ、関心事が「経済成長」「貧困からの脱却」という経済学の通常のテーマから、「社会の調和」「民主主義の確立」という(やや)政治学・社会学寄りのテーマに軸足を移したことにしても、この仮説に従えば「意図せざる必然」であった可能性が高いことを指摘できる。さらに、賛否の分かれる人物評・通説的理解に対しても、彼を「中道右派」「オーストリア学派の末裔」「リバータリアンの中の良識派」と解釈したならば、主張のブレもそれほど大きくない、という側面も指摘したい。

往々にして、「屈折した軌跡を残した20世紀の巨人」と評されるハーシュマンであるが、報告者は「単純化された経済学(もしくは社会科学)の思考を乗り越えるヒントを提示した人物」として肯定的に評価したい。21世紀になった現在もなお、「市場か、国家か」「開発か、環境か」「規格統一か、多様性の保持か」といった、分かりやすいように見えながらもマクロ的視点に偏りがちで、しかも二者択一式の視点に埋没しがちな議論に対し、様々な学問分野を越境したハーシュマンは、我々に豊穡な世界観を提供し続けている。

キーワード：一元的世界観への懐疑、二分法的思考の拒否、漸進主義

* E-Mail: conosur.gala@gmail.com